

種子島における中核的農家の経営類型とさとうきび作の位置

笹倉修司・樽本祐助
（九州沖縄農業研究センター）

Shuji Sasakura and Yusuke Tarumoto :
The Position of Sugar Cane Production on Main Farm Management Patterns in Tanegasima

1. はじめに

種子島のさとうきび作付面積は2500haを超え島内で最も作付けの多い作物であるが、現在の栽培品種では糖度上昇との関係で収穫開始時期が12月中旬以降に制約されている。このため、豊作年における収穫終了の遅れに伴う次期（株出栽培・新植）の生育・収量や他作物との競合等の悪影響を回避するとともに、個別経営における規模拡大を目的として、現在、10月下旬から収穫可能な品種育成が進められている。そこで、本稿では、新品種導入のターゲットとなる経営を抽出する前段として、種子島における認定農家等中核的農家の経営類型を整理するとともに、このうち、さとうきび作を取り入れている経営を対象に類型化し、類型別の特徴を明らかにする。

2. 方法

まず、種子島1市2町の認定農業者データを基に、さとうきび作の位置（首位、副次、なし）別にグループ化し、組み合わせの有無やその作目によって主要な類型を整理した。

次いで、製糖工場における個人別データ（1999年から2003年のさとうきび作付規模、2001年/2002年期における出荷重量と収穫作業形態）および収穫機械に関わる生産組合員（以下、機械組合員と呼ぶ）か否かとを組み合わせ、類型別の特徴を分析した。

3. 結果および考察

1) 認定農家、機械組合員の関係と作付シェア

種子島全体の認定農家のうち機械組合員でもある農家は2割に過ぎない。また、これを機械組合員全体から見ると、認定農家でもある組合員は45%を占める。

さとうきび作付規模階層別に、認定農家や機械組合員農家の占めるシェアをみると、1ha未満では農家数、面積とも1割前後であるが、上位階層に進むにつれ、まず認定農家シェアが、次いで機械組合員シェアが高まる。特に5ha以上層ではほぼ全てが機械組合員（認定・非認定含む）であり、機械装備の有無が規模を規定していることがわかる。

2) 認定農家におけるさとうきび作の位置

認定農家のうちさとうきび首位の経営は36%、副次経営は33%、ない経営は31%の構成となっている。

さとうきび首位経営のうち単一経営は2割程度に止まり、他は何らかの複合部門を有する。組み合わせ作目で最も多いのは繁殖牛、次いで加工・原料用かんしょである。さとうきび副次経営では、首位作目で最も多いのは首位経営と同様繁殖牛であるが、次ぐのは葉たばことなり、露地・施設の花や野菜も増加する。そしてさとうきびのない経営での首位作目は酪農、茶、葉たばこが多くなる。すなわち、組み合わせ適性は集約度と下限単位規模に規定されていることが指摘できる。

3) 類型別のさとうきび作付規模

さとうきび首位経営での規模の大小を機械組合員との関係でみると、非組合員<小型搬出機<ドラム脱葉機<ハーベスタ、の順となる。また、組み合わせ作目との関係では、加工・原料用かんしょ複合が最大、次いでその他作物複合、繁殖牛複合と続き、単一経営の規模は意外に小さい。単一経営の経営主年齢は他の複合経営よりやや高いことから、高齢化に伴う単一化がこうした現象をもたらしているといえよう。

4) 組み合わせ作目の規模

繁殖牛部門を有する経営において、繁殖牛飼養頭数と機械組合員との関係を見ると、さとうきび首位経営ではいずれも10頭前後と大差ないが、副次（繁殖牛首位）経営では頭数増加とともに機種別の差が生じ、ハーベスタ組合員農家は繁殖牛単一経営とほぼ同等の飼養頭数（30頭台）となっていて、機械導入が飼養頭数拡大をもたらしたことが指摘できる。

5) 収穫作業との関係

機械組合員農家は当然、自己機械収穫が多いが、ハーベスタでは大半が自己機械利用であるのに対し、小型機械（小型搬出機・ドラム脱葉機）では自己機械利用もあるがハーベスタへの委託もかなり多い。また、非組合員においては組み合わせ作目によって3割から7割と幅はあるものの全類型で何らかの委託を行っており、小規模層だけでなく認定農家においても機械収穫委託を前提とした経営構造となっていることが明らかになった。

4. まとめ

作付規模の上位階層では機械組合員や認定農家のシェアが圧倒的に大きい。特に機械組合員か否かの違いが大きく、機械収穫が規模の規定要因であるといえる。

類型別にみると、規模が大きいのは繁殖牛や加工・原料用かんしょとの複合経営であり、単一経営の規模は意外に小さい。また、さとうきびを副次部門とする経営では繁殖牛飼養頭数にみるように、収穫機械化が基幹部門の拡大に貢献していることが明らかになった。

収穫形態をみるとハーベスタ組合員はほぼ全て自己機械利用であるが、非組合員ではさとうきびが首位であっても機械収穫委託に依存しており、ハーベスタ収穫はさとうきび生産や経営展開にとって欠くことのできない存在となっているといえる。

ところで、新品種導入との関係で気かりな点は主要な類型が加工・原料用かんしょ複合経営であることである。かんしょとさとうきびの収穫競合が予想される。しかし、この競合は土地ではなく労働力利用の競合であることを考えると、競合時期が異なる複合経営類型間での出役調整等の作業システムの構築、換言すれば、異種複合経営による生産組織等の育成の重要性が示唆される。